

第2学年 道徳学習指導案

2組 計28人 (男子14人 女子14人)

指導者 野下 賢剛

1 主題名 遠慮しないでやってみよう (1-(3) 勇気) 資料名 「ぼくは手をあげる」 (自作資料)

2 主題について

(1) 内容項目と

(2) 指導内容についての基本的な立場

その系統

【低学年1-(3)】

よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。

【中学年1-(3)】

正しいと判断したことは、勇気をもって行う。

【高学年1-(2)】

より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけずに努力する。

【高学年1-(3)】

自由を大切に、自律的で責任のある行動をする。

「勇気」とは、人間の弱い心を盛り立て、自分がよいと思ったり正しいと判断したりしたことを実現させる力である。勇気は、自己の確立を目指す人間にとってなくてはならないものである。ここでは、勇気を出すことの大切さや意義を自分の経験や考えとのつながりで理解し、何事にも積極的に取り組むための考えを身に付けることとなる。

この期の子どもたちは、純粋で明朗な心をもって積極的に行動しようとする傾向がある反面、まだ十分に集団生活に慣れていないこともあり、引っ込み思案になったり、ものおじしたりすることも少なくない。そこで少しでも勇気をもてるように、本学級では、学習時に積極的に発表することを学級全体の努力点として共通理解させ、発表しやすい雰囲気作りや発表話型の確認、読み聞かせによる発表意欲の喚起などに努めている。しかし、子どもによっては、人前で話すことの恥ずかしさや答えを間違ふことの不安から、発表しようという勇気が湧いてこない場合がある。

そこで、本主題では、勇気を出して発表する場面に焦点化し、より広い視点から発表することのよさを考えられるようにしていく。勇気を出して発表することが自分にとってどのような喜びを生み出すのか、自分以外の人や集団にとってどのような幸福につながるのかを理解できるようにする。そして、勇気を出して発表することの多様なよさの中から、自分が「大切にしたい考え」を見付け出し、その考えにこだわりがもてるようにする。これらのことにより、勇気を出して発表するという行為の目的が明確になり、意欲をもった実践につながることに気付くことができるようにする。そして、子どもたち一人一人が進んで発表し、みんなで学び合おうとする意欲や態度の育成を図る。

(3) 主題の指導内容及び道徳的価値の構造

第1学年及び第2学年

よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。

道徳的实践を支える考え方や感じ方

対自分	ア 勇気を出せて気持ちがいい イ 勇気を出せた自分に自信がもてる ウ 進んで勇気を出せる自分でいたい	(自己の快感) (自信・意欲の高まり) (自己の成長)
対他者	エ 勇気を出すと友達から褒められる オ 勇気を出すと他者が助かる カ 勇気を出すことで仲間と信頼し合える	(他者からの称賛) (他者の幸福) (他者との共感)
対社会	キ 勇気を出せたことを他者が喜ぶ ク 勇気を出し合える集団ができる	(他者の喜び) (望ましい集団の形成)

二面性

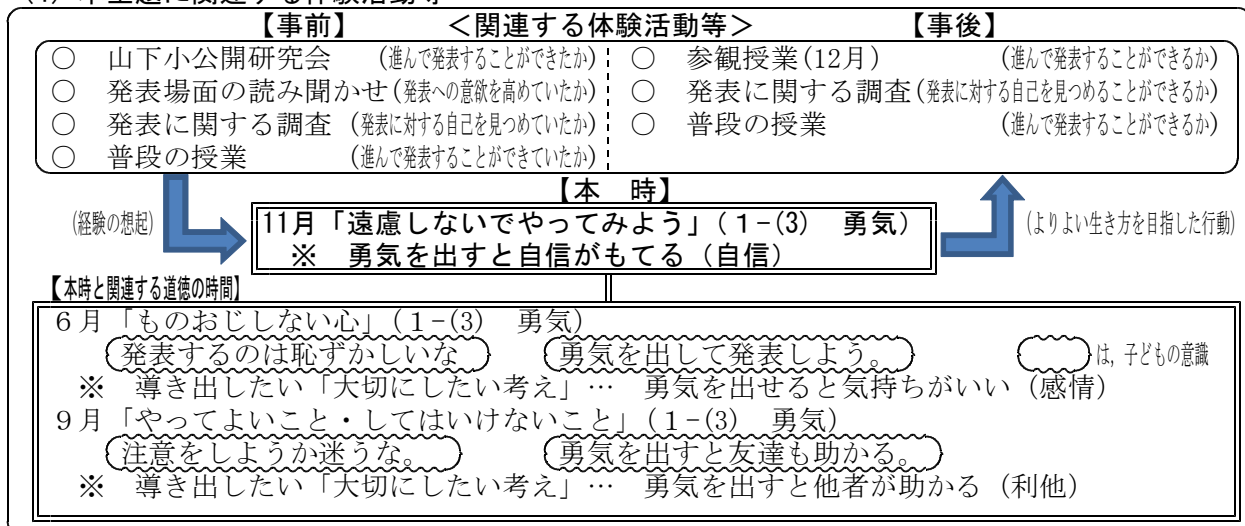
心の葛藤

実践を阻む要因

- a 自信のなさ
(勇気を出せないかも)
- b 逃避
(勇気を出したくない)
- c 怠惰
(面倒くさい)
- d 羞恥心
(勇気を出すのは恥ずかしい)
- e 思慮不足
(勇気を出すのはかっこ悪い)

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| ① 勇気を出すと自信がもてる(自信) | ② 勇気を出せると気持ちがいい(感情) |
| ③ 勇気を出せる自分になりたい(成長) | ④ 勇気を出すと友達から褒められる(称賛) |
| ⑤ 勇気を出すと他者が助かる(利他) | ⑥ 勇気を出すと仲間と信頼し合える(共感) |
| ⑦ 勇気を出せたことを他者が喜ぶ(幸福) | ⑧ 勇気を出し合える集団ができる(形成) |

(4) 本主題に関連する体験活動等



3 子どもの実態 (調査日 平成25年9月10日 調査人数 28人)

(1) 本主題に関するこれまでの経験「発表をしているか」		
している— 20人 していない— 8人		
(2) 本主題に関するこれまでの経験の根拠「なぜ発表したりしなかったりするのか」		
発表している根拠		発表していない根拠
- 発表したい (6) - 自分の考えをみんなに伝えたい (2) - 発表した方がいい (1) - 誰かが発表すると答えが出る (1) - 学級目標である (1)		- みんながよく分かる (5) - 先生、親が喜ぶ (2) - 気持ちがいい (1) - 立派な大人になる (1)
(3) 本主題に関するこれからへの希望「発表をする人になりたいか (人になりたいか)」		
なりたいたい— 28人 なりたくない— 0人		
(4) 本主題に関するこれからへの希望の根拠「なぜ発表する人になりたいか」		
(2) で発表していると答えた子どもたち		(2) で発表していないと答えた子どもたち
- 発表すると分かる (6) - 喜ばれる、褒められる (3) - 発表したら気持ちがいい (2) - みんなのためになる (1)		- もっと発表できる人になる (4) - かっこいい (2) - 発表した方がいい (1) - いっぱい意見が出る (1)
(5) 本主題に関わる行為を行う意義「なぜ発表することは大切か」		
- 考えがみんなに伝わる (8) - 気持ちがよくなる (3) - 発表できる人になる (1)		- かしこくなる (7) - 褒められる<先生・親> (2) - 発表はよいこと (1)
(6) 本主題に関わる行為を行う心構え「発表するためにどんな考えをもつか」		
- できるだけ発表するぞ (9) - すっきりする (3) - 自分を信じて (1)		- 間違ってもいいから (6) - 恥ずかしがらない (2) - みんなのために (6) - よく考えよう (1)

(1)から、普段あまり発表をしていないと考えている子どもが8人いる。ちなみに、5月に行った同調査では、学級の半数以上が発表していないと考えていた。(2)から、発表している根拠として、「発表したい」と発表に対して前向きな考えや「みんながよく分かる」と他者の幸福を意識した考えが多く挙げられている。また、発表していない根拠としては、「難しい」「恥ずかしい」ということが多く挙げられている。(3)から、発表をする人になりたいと全員が考えていることが分かる。5月の同調査では、1人がなりたくないと答えていた。(4)から、発表する人になりたい根拠として、「発表すると分かる」「もっと発表できる人になる」など、自分の成長につながる考えが多いことが分かる。(5)から、発表することは自分にとってよいことと捉えている子どもが多いと共に、「みんなが分かる」という利他の考えを挙げている子どもが6人いることが分かる。この考えは、5月の同調査の時の4人よりも増えている。(6)から、発表するためには発表に対して前向きな考えをもつことが大事だと考えている子どもが多いことが分かる。また、「みんなのために」という考えも5人が意識している。さらに、発表すると自信がもてるという本主題に関連する考えとして、発表するために「自分を信じて」という考えを1人の子どもが挙げていることが分かる。

この調査を踏まえ、発表することのよさを感じている子どもたちの考えを聴くことを通して、発表を苦手と考えている子どもたちが、発表に対する前向きな考えをもてるようにしていきたい。その際、指導内容の重点化を図り、本主題に関連する「発表すると自信がもてる (自信・意欲の高まり)」という自分自身の成長につながる考えをみんなで話し合わせ、勇気を出すことのよさを深く追求させていきたい。また、子どもたちの考えの中にあった、発表すると「みんなが分かる」という利他の考えを取り上げ、みんなで発表し合える学級を作ろうという考えに広げていきたい。

4 資料について

(1) 資料のあらすじ

主人公のれい太は、発表が大好きだった。そんな時、友達から「発表して何が楽しいの。」と苦言を言われ、発表することをためらう。発表しない日が続いたある日、隣の席のまり子が、発表していたことを褒めてくれる。やはり発表すべきだと決心したれい太は、勇気を出して発表する。その発表を喜んでいる周りの人たちの様子を見て、力がわいてきたれい太だった。

(2) 資料の分析・子どもの反応予想

場 面	分析（価値構造図 p 149から）	予想される子どもの反応
1 発表をためらう れい太 【弱さ・迷い】	ウ 自己の成長（対自） ク 望ましい集団の形成（対社） ----- b 逃避（勇気を出したくない） d 羞恥心（勇気を出すのは恥ずかしい）	・ 発表する自分でいたい。 ・ みんなで発表し合いたい。 ・ 発表したくない。 ・ 発表するのは恥ずかしい。
2 まり子に発表し ていたことを褒め られたれい太 【意義】	イ 自信・意欲の高まり（対自） ウ 自己の成長（対自） エ 他者からの称賛（対他） ク 望ましい集団の形成（対社）	・ やっぱり発表しよう。 ・ 発表する自分でいたい。 ・ 発表すると喜ぶ友達がいる。 ・ 発表し合う学級がいい。
3 勇気を出して発 表できたれい太 【感動】	① 自信 ② 感情 ③ 成長 ④ 称賛 ⑥ 共感 ⑦ 幸福 ⑧ 形成	・ 発表できて気持ちがいい。 ・ 友達が喜んでくれた。 ・ これからも発表しよう。

この資料は、発表をためらっていた主人公が、友達の応援を受けて思い直し、勇気を出して発表しようとする話である。周りの友達を目を気にしながらも自分の思いを大切に、勇気を出して発表するという内容は、人前で話すことの恥ずかしさや答えを間違えることへの不安から、発表に自信がもてないことがある本学級の子どもたちにとって身近な内容であり、共感しやすい資料であるといえる。子どもたちは、心の弱さに悩まされながら発表することを迷ったり、やっぱり勇気を出して発表することを決めた主人公に称賛の思いをもち、自分と重ね合わせて、これから自分も主人公のように、勇気をもって行動する人になろうという実践意欲を高めることが期待できる資料である。

5 指導に当たって

(1) 「思考活動」を充実させるつながりを重視した道徳の時間

道徳の時間の事前と事後とのつながりを重視する。事前において、本時で扱う道徳的価値である勇気についての実態調査を行い、子どもたちが日常の生活や考えを振り返る「思考活動」の充実を図る。また、事後には、本時で活用した「自分づくりカード」に記した「大切にしたい考え」を思い出す「思考活動」の機会をつくり、道徳の時間と日常の生活とのつながりを大事にする。

(2) 「思考活動」を充実させる他者との交流

資料の主人公の心情に迫る「見つめる」過程において、子どもが他者との交流を通して自分の考えを分類・整理する「思考活動」の充実を図る。その際、資料の主人公の気持ちにより共感できるようにワークシートを活用する。ワークシートに自分の考えを表現することを通して、主人公が発表できたことでどのようなよさがあったかを考えることができるようにする。そして、視点（対自分・対他者・対集団社会）を明確にした友達との考えの交流を行い、発表することの意義を分類・整理して把握できるようにする。

(3) 「思考活動」を充実させる「評価資料」の工夫

子どもの実態をより道徳の時間に反映させ、道徳の時間を通して「思考活動」を積み重ねる子どもの姿を見取る「評価資料」を工夫して活用する。「評価資料」で抽出した注目児については、座席表に明記し、実態調査の情報と合わせて意図的指名や個に応じた指導に役立てる。

(4) 「思考活動」を充実させるICT活用

終末の「高める」過程において、子どもが自分の思いを表現する「思考活動」を促すことをねらいとして、画面カメラや電子黒板などのICTを活用する。本時の導入から終末にかけて自分の考えがどのように変容したかを、ワークシートや「自分づくりカード」を提示して表現できるようにする。このように、他者に伝えるためにICTを活用して、自ら自分の考えの変容を示しながら表現活動を行うことによって、もっと自分の考えを表現したいという夢・希望を膨らませることができるようにする。

6 本 時

(1) 目 標 発表することのよさを広い視点から考え、意欲的に発表することが自分の自信につながるという心情を育てる。

(2) 「思考活動」を充実させる他者との交流

- 中心発問に対する自分の考えをワークシートに分類・整理して書き表し、友達の考えとの交流を行うことで、発表することのよさを広い視点からとらえたり、多様な考えの中から大切な考えを見付け出したりする。

(3) 展 開 () は教師の言葉掛け () は予想される子どもの反応 (◆) は重点評価項目 ◎は「思考活動」 ☆はICT活用の留意点

過 程 (分)	主 な 学 習 活 動 と 予 想 さ れ る 子 ど も の 反 応	教 師 の 指 導
気 付 く (5)	1 日頃の学習時の発表場面について考える。 発表ができた時にはどんな気持ちになりますか。また、なぜできない時があるのでしょうか。 発表ができた時にはすっきりします。でも、自信がなくて発表ができない時があります。 もっとはっぴようするための「大切にしたい考え」は何だろう。	☆ 実態調査の結果を電子黒板で提示し、その結果について感想を交流できるようにする。 ○ 発表ができた時の快い感情と、発表ができない理由を基に意識と行動の矛盾に共感できるようにし、問題意識を高めたためあての設定ができるようにする。 ○ めあてに、深める過程で扱う「大切にしたい考え」という言葉を入れることで、学習に見通しをもつことができるようにする。
見 つ め る (25)	2 資料「ぼくは手をあげる」を視聴し、主人公れい太の気持ちを中心に話し合う。 (1) 発表をためらうれい太の気持ちについて話し合う。 発表したい 迷い 発表したくない - 発表する自分でいたい。 - 発表するのは恥ずかしい。 - みんなで発表し合いたい。 - 友達に笑われたくない。 (2) まり子に発表していたことを褒められたれい太の気持ちについて話し合う。 やっぱり発表しよう。 発表する自分でいたい。 発表すると喜ぶ友達がいる。 (3) 勇気を出して発表することができたれい太の気持ちについて話し合う。(意義) ◎分類・整理 対自 対周 - 発表すると気持ちがいい。 - 発表すると自信がもてる。 - これからも発表しよう。 - 発表したことを友達が喜んでくれた。 - みんなで発表し合える学級になれそうだ。	☆ デジタル化した資料を、電子黒板で提示する。 ○ 「心のつなひき」を活用し、主人公の気持ちを視覚的に表すことで、発表するかしないかで迷う気持ちに共感できるようにする。 ○ 中心発問に対する考えをワークシートに書き表すことで、視点をもって自分の考えを明確にし、友達の考えと交流できるようにする。 ◆ 発表できた時の気持ちを、価値観の類型化の2つの視点〔対自分、対周囲(他者・集団社会)〕で分類・整理することで、発表することの意義についての考えを広げている。【観察、ワークシート】
深 め る (10)	3 これからの自分を見つめ、発表することに関する「大切にしたい考え」と生活を結び付ける。 「発表すると自信がもてる」と思いますか？今まではどうでしたか？どうしてそう思いますか？ 発表すると自信がもてると思います。発表するとすっきりしてまた発表しようと思います。 発表するとみんなのためにもなって自信がつきます。これからも発表したいです。 これからあなたが自分の生活に生かしたい「大切にしたい考え」は、どんな考えですか。	○ 多様な考えの中から大切だと思う考えを焦点化することで、見付け出した考えにこだわりをもち、話し合うことができるようにする。 ◆ 指導内容の重点化を図る場面で、「発表すると自信がもてる」という本主題に関する考えについて話し合うことで、「過去・現在・未来」の視点から考えを深めている。【観察、発言】
高 め る (5)	4 ワークシートと「自分づくりカード」を比べ、自分の考えの変容に気付く。◎表現(比較・実感) ぼくは、発表すると自信がつくという考えを大切にしたいです。 「発表すると自信がつく」という考えを、発表を迷った時に思い出したいです。	☆ 関連する生活場面の写真を提示することで、今後の自分の生活を考える心の準備ができるようにする。 ○ 「自分づくりカード」を用いて、本主題に関する「大切にしたい考え」を表現することで、これからの生活への実践意欲が高められるようにする。 ☆ ワークシートと「自分づくりカード」を並べて電子黒板に提示することで、考えの変容に気付き実感することができるようにする。

第2学年「勇気」における「評価資料」

重点評価項目

- 1 勇気を出すことのよさについての考えを、価値観の類型化を取り入れ分類・整理することで、子どもたちが友達の考えと比べ、多様な考えに気付いたり、大切な考えを見付け出したりしている。
- 2 終末で本時の学習を振り返り、ワークシートや「自分づくりカード」を見比べることを通して、自分の考えの変容を実感している。

見付け出させたい「大切にしたい考え」

勇気を出すと自信がもてる

評価の観点

- ア 友達の考えと比べることで、多様な考えに気づき、自分の考えを広げている。（重点評価項目1）
- イ 多様な考えの中から大切な考えを見付け出し、自分の考えを深めている。（重点評価項目1）
- ウ 自分の考えの変容に気づき、ICTを活用して全体に説明することで、表現することのよさを実感している。（重点評価項目2）

評価方法 ア…発言・観察、イ…ワークシート・「自分づくりカード」、ウ…ワークシート・発言・観察

評価の実際

「ア 友達の考えと比べることで、多様な考えに気づき、自分の考えを広げる」について（重点評価項目1）

- 友達の発言や分類・整理された板書を基に、多様な考えに気づき発言している。【発言・観察】

<事前>

<事中>

<事後>

「イ 多様な考えの中から大切な考えを見付け出し、自分の考えを深める」について（重点評価項目1）

- 多様な考えの中から大切な考えを見付け出し、「自分づくりカード」の「大切にしたい考え」に生かしている。【ワークシート・「自分づくりカード」】

<事前>

<事中>

<事後>

「ウ 自分の考えの変容に気づき、ICTを活用して全体に説明することで、表現することのよさを実感する。」について（重点評価項目2）

- ① 自分の考えの変容に気付いている。【ワークシート・観察】

<事前>

<事中>

<事後>

- ② 自分の考えの変容を、ICTを活用して全体に説明している。【発言・観察】

<事前>

<事中>

<事後>

ぼくは手をあげる

はじめまして。ぼくは二年生の れい太です。じゅぎょうでは
どきどきするけど、じしんをもって はっぴようすること
ががんばっている。まわりの友だちは、あまりはっぴようしないの
だけ。何でしないのだろう。

このあいだ、せきが近い、たかねくんに、こんなこ
と、言われたんだ。

「れい太くん、そんなに、はっぴようして、何がたのし
いの。みんなが、れい太くんは、目立ちたいから、はっ
ぴようするんだって、言っているよ。」

それを聞いて、ぼくははっぴようする、じしんが
なくなってしまった。そして、はっぴようしない日が、一週間、つ
づいた。しんゆうの、まことくんが、元気がないぼくを、しんぱ
いして、声をかけてくれた。だけど、ぼくはどうしても
はっぴようする気に、なれなかった。



そんな、もやもやしている日が、つづいたある日、とな
りにすわっている、まり子さんが、声をかけてきた。
「れい太くん、このごろ、はっぴようしていない
ね。わたし、いつも、れい太くんの、考えて
はつきりしていて、いいな、と、思っていたの
よ。」

ぼくは考えた。やっぱ、はっぴようしないと、まい日
気もちがよくなかった。よし、ゆう気を出してはっぴよ
うしよう。



どうとくの間、はっぴようできる時がきた。まわりの友だちの
手があがらない。ぼくがはっぴようする時だ。いつもより、とて
もきんちようする。ここで手をあげないと。

「はい！」



思いきって手をあげた。先生が、えがおで、ぼくにあて
た。まことくんも、まり子さんも、うれしそうに、はっ
ぴようできた。ぼくを見ている。ぼくがはっぴようした
あと、まわりの友だちのはっぴようが、つづいた。はっ
ぴようできて、よかった。何かじぶんの体に、力がわい
てきたような、気がした。